

未来を創る 朝鑑賞 vol.3

東御市小中学校での取り組み

—「話したくなる・聞きたくなる」があふれる教室に—

朝鑑賞とは？

授業前の朝の10分間、
クラスで一つの美術作品を鑑賞する時間です。
この時間では、対話鑑賞という手法を取り入れ、
子どもと先生が同じ目線に立って、
感じたことや気づいたことを伝え合います。
朝鑑賞は、美術の知識を深めたり、
正解を導き出したりすることが目的ではありません。
お互いの見方・考え方をもち寄り、その違いを楽しみながら、
さらに自分の考えを広げていくことを大切にしています。
朝鑑賞とは、こうした“対話”の積み重ねによって、
お互いを尊重し合う姿勢を育んでいく活動です。



朝鑑賞 こんな感じで やってます！

東御市の全小中学校で行われている朝鑑賞。
ここでは、その様子をお届けします。



ナビゲーター
小沢和実
東御市地域おこし協力隊。
朝鑑賞のコーディネーターをしています！

和 小 学 校



滋野小学校



小 学 校 祐 津

ちよこっと POINT!
朝鑑賞では、一人ひとりのタブレットと教室のモニターで作品を鑑賞しています。拡大して見たり、気づいたことを書き込んだり、タブレットを活用している姿が見られます。

北御牧小学校



田中 小 学 校

朝鑑賞で使用するのは、市内美術館の所蔵作品。現在、約200点もの作品データが、各学校に共有されています。

ちよこっと POINT!



東部中学校

北御牧中学校



ここに注目!

学校だけでなく、地域にも広がる朝鑑賞

PICK UP 1

絵を見て、おしゃべりして、ぐんぐん育つ! ~保育園でもはじまった朝鑑賞~

小学校で続けてきた朝鑑賞が、保育園にも広がっています。絵を見ておしゃべりする積み重ねが、“自分の気持ちを伝える力”や“人の話を聞く力”、“答えのない問いを楽しむ力”を、遊びの中で育てます。小学校への入学前に、授業に近い体験をしておくことで、「これ、やったことある!」という安心感も生まれます。保育園での朝鑑賞は、子どもたちの学びをやわらかくつないでいます。



みんなが見ている絵: はらべこめがね《ああ、たのしや。》



PICK UP 2

夏休み特別講座「片桐仁さんと!アートでおしゃべり鑑賞会」

夏休みに、先生方向けの新しいスキルアップ研修として、タレント・俳優として活躍される片桐仁さんをお迎えした特別講座を開催しました。そして、翌日には、地域の方々に実際に朝鑑賞を体験していただくワークショップも開催しました。

片桐仁さんと参加者の皆さんの視点が混ざり合い、とても盛り上がる会となりました。



美術大学を卒業し、美術の番組にも出演しているので、“絵は見慣れている”と思っていました。ですが、今回、朝鑑賞を体験したことで、“見ているつもりになっている”自分に気がきました。絵を対話しながら見るなかで、どんどん自分の見方が更新されていく点がとても印象的でした。他の人の見方・考え方を知ることで、“自分の意見とは何なのか”がわかる時間ですね。



片桐仁さんからご感想をいただきました!

特別座談会

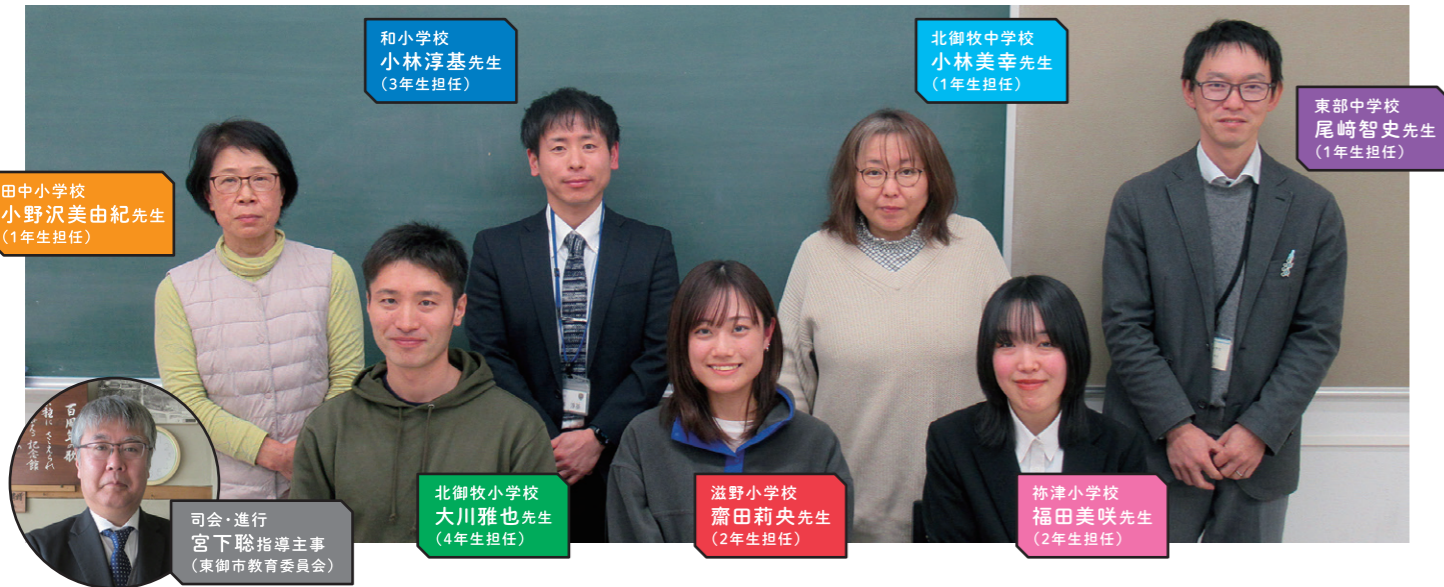
～朝の時間でうまれる
“思考・判断・表現”の循環～

先生たちが語る、

朝鑑賞の本音！



朝鑑賞を実践するなかで、先生たちはどんなことを感じ、考えているのでしょうか。今回は、市内の先生方に、実践の中で感じていることを率直に語っていただきました。現場ならではの“本音”をお届けします！



田中小学校
小野沢美由紀先生
(1年生担任)

和小学校
小林淳基先生
(3年生担任)

北御牧中学校
小林美幸先生
(1年生担任)

東部中学校
尾崎智史先生
(1年生担任)

北御牧小学校
大川雅也先生
(4年生担任)

滋野小学校
齋田莉央先生
(2年生担任)

祢津小学校
福田美咲先生
(2年生担任)

司会・進行
宮下聡指導主事
(東御市教育委員会)

実践から感じた変化と課題

宮下:朝鑑賞に対して、手応えを感じる点や、反対に難しさを感じる点と取り組む上での課題をお聞きしたいと思います。

小野沢:私は、絵そのものに対して苦手意識をもっていました。そのため、朝鑑賞が始まった当初は、不安に感じていました。しかし、“子どもたちが思ったことを自由に話していい”、“絵には間違いや正解はない”という話を聞き、肩の荷が下りたのを覚えています。



現在は、子どもたちが自分の見方や考え方を自由に話し合う様子を見ながら、私自身も楽しんで取り組んでいます。

小林淳:実践を重ねる中で、子どもたちは絵を見ながら自然につぶやきや対話を交わすようになり、友達の考えに対して「たしかに」と反応する姿も見られるようになってきました。こうした積み重ねにより、友達の考えを認め、そこから自分の考えを深めることが、日常の姿として定着してきていると感じます。また、図工の鑑賞や社会科の資料読み取りの場面でも、見方を広げて考



える発言が増えているという声を、他の教員からも聞いています。自分自身の変化としては、子どもたちの考えの根拠を理解しようと意識しはじめ、言葉の返し方を工夫するようになりました。一方で、限られた時間の中で、全員の考えや根拠を十分に引き出しきれていないことには、今も難しさを感じています。

大川:私の学級経営の目標は、“自然に友達同士で対話できるクラス”をつくることです。朝鑑賞は、この目標を達成するために非常に有効な活動だと感じています。

さまざまな発言が出てくるので、最後に私が一つポイントを決め、「これが〇〇に見えるって人がいたね、じゃあ、自分にはどう見えるかな」と投げかけると、子どもたちは近くの人と自然に話し始めます。こうした姿から、子ども同士で対話する力が育ってきていると感じています。他の授業でも、そのような姿が見られるようになってきました。



齋田:普段、連絡黒板に“朝鑑賞”と書くと、「よっしゃー!」という声が多く上がり、「もっとやりたい」という反応があることが、とても嬉しいです。発言をしないまま終わる子がほとんどおらず、積極的で、よい時間になっていると感じています。

一方で、さまざまな意見が飛び交い、場は盛り上がるものの、「たし

かに「本音」といった反応のみで一つの発言が終わってしまいます。また、発言したい子が多く、意見を拾うだけで時間が終わってしまうこともあるので、子どもたちのつぶやきを、さらに深めていけたらよいと考えています。



福田:私のクラスは35人学級という大人数なので、4人グループに分かれて朝鑑賞をしています。スタートの合図もしないうちに、自由に子どもたちが話し始めているので、私は全体を見てまわっています。

この方法を一年通してやってきて、学級経営の土台になっていたなと感じています。他の授業でも「相談し合いながらやっていいよ」というと、自然とグループで話し始める姿が見られ、さまざまな考えを認め合い受け入れられる子どもたちになってきたという風に思っています。本当は、全員で一緒に取り組みたい思いますが、10分という限られた時間では発言できない子も出てしまい、難しさを感じています。



宮下:なるほど。では、中学校ではどのような様子でしょうか。

小林美:小学校では盛り上がっている様子が印象的ですが、中学校では学年が上がるにつれて、発言の仕方に変化を感じる場面もあります。特に昨年担当した3年生では、発言する生徒に限られ、聞き役に回る生徒が多くなることもありました。

現在は1年生を担当しており、発言自体は比較的多いものの、次第に“ウケ狙い”のような発言が増えていくこともあるので、対話をどのように深めていくかが課題です。

また、作品選びについても工夫の必要性を感じています。小学校ですでに扱われた作品も多いため、中学生にとって新鮮に向き合える作品をどのように選んでいくか、考えていきたいと思っています。



尾崎:小林(美幸)先生のお話にもあったように、学年が上がるにつれて特定の生徒の発言が中心になる場面もあります。昨年担当した3年生では、そうした点に難しさを感じることもありました。

現在は1年生を担当しており、考えを言葉にしてくれる生徒が多いですが、この雰囲気をもとに保っていくかは、今後の課題です。

自分自身の変化としては、子どもの発言を否定せず、受け止める姿勢をより大切にするようになりました。授業の中でも、子どもの気持ちに寄り添う意識が高まってきていると感じています。



子どもの考えに寄り添う

宮下:各学校でさまざまな変化や課題がみられているんですね。では、先生方にとって特に難しさを感じる点はありますか？

尾崎:忙しさや朝の時間の使い方によって、計画通りに実施できないこともあります。また、朝から一定のエネルギーを保つことの

難しさを感じる場面もあります。

小林美:子どもたちの反応が豊かな分、意見を整理していくには、尾崎先生がお話しされたように、エネルギーが必要です。また、ネガティブな発言が出た際に、どのように対応するか、悩むことがあります。



大川:私は、朝鑑賞を自分自身が前向きな気持ちになれる時間として捉えています。多様な考えを受け入れ、それをさらに広げていくことで、子どもたちがワクワクする姿が見られます。これは、テストやドリルの時間では見られない大事なものだと感じています。

小学校でも発言がネガティブな方向に向かうことがありますが、そんなときは、「なるほど、そう感じたんだね。じゃあ、明るく捉えるとうなるかな?」と視点を変える声掛けをしています。そうすると、新たな発言につながることもあり、手ごたえを感じています。

小林淳:子どもたちの発言には、その子なりの学びや経験が関わっていると思います。もしネガティブな意見がでたとしても、そう感じた背景に関心を寄せて聞くことを心がけたいです。

小野沢:発言の背景で言えば、ネコが並んだ様子の写真を見て、「このネコは、宿題をちゃんとやったのかと家族に言われているんじゃないか」と話した子がいて、その子自身の経験と結びついているのだと気づきました。そうした子どもの背景が垣間見えるとき、楽しさを実感します。



現在は、発言しやすい作品を選びがちですが、一見分かりにくい作品やネガティブな印象を受ける作品を扱う際には、「どんなふうを感じる?」など、問いを工夫する必要性を感じています。

宮下:確かに、ネガティブな意見が出たときは、ヒヤッしたり不安に感じたりすることもありますよね。ですが、そのような言葉で表現していたとしても、背景には子どもが過去に学んだことや経験したことなどの、根拠があるはずなんです。そういった子どもの“思考の過程”に目を向け、寄り添ってあげたいですね。

また、中学生になると、大人数の前で自分の考えを発言することに抵抗を感じる生徒も増えてきます。ただ、朝鑑賞を通して大勢の前で発言できるようになろう、ということではありません。少人数で行うなど、その子にあった表現の方法を模索しながら取り組んでいくことも、重要であると思っています。

まとめなくてもいい時間

宮下:朝鑑賞は、一つの意見に集約することを目的としない時間でもあります。その点についてはどうお考えでしょうか。

小林淳:私は、「今日の朝鑑賞どうだった?」と、振り返る時間を設けています。すると、「〇〇さんの話を聞いて、そう見えるようになった」というように、友達の意見を受けて見方が変わったことを話してくれるようになりました。

子どもたちの反応

大川:私は最後に、「友達の考えで、なるほどと思ったことを教えて」と、他者推薦の形で発言してもらっています。自分からは言いづらくても、推薦されることで言葉にできる子もいるのではないかと感じています。

齋田:私のクラスでは、黒板に簡単な絵を描き、そこに気づきを書き足していく方法を取っています。最後の2分ほどで「もう一度黒板を見てみよう」と促すと、書かれていることをもとに一斉に話し始め、自由対話のような形で終わることが多いです。



福田:グループごとの意見が似てきたときでも、どこかの班は違う見方をしているので、「○○班はこう言っていたけど、みんなはどう?」と全体に投げかけるようにしています。すると、「え、ほんと?」と、もう一度作品を見直す姿が見られ、最初の考えが覆る瞬間が生まれていると感じます。

尾崎:私は、無理にまとめる必要はないのではと思っており、「これは何を描いた絵なんだろうね。私はこう見えるけど、みんなはどう?」と投げかけて終わることが多いです。

一方で、作品の題名や意味が明確にならないまま終わることは子どもたちにとって納得した終わり方になっているのか、不安に感じるときもあります。

正解がないからこそその面白さ

宮下:確かに、朝鑑賞では作品の題名や作者名などの情報をあえて伏せているので、モヤモヤしたまま終わることもありますよね。正直なところ、答えが欲しいと感じることはありますか?

小野沢:基本的には答えを求めてしまう気持ちはありますが、そうじゃなくてもいいと自分の中で切り替えるようにしています。子どもたちの感じたことをそのまま出していっていいのだと意識する中で、だんだん自分自身も楽しくなり、今では無理にまとめず、「いろいろな意

見が出てすごかったね、先生もたくさん教えてもらったよ」と、過程そのものを認める形で終わるようになっていきます。

大川:子どもたちから疑問が出ると、ヒントを伝えたいこともあります。ただ、あえて答えは出さず、「気になったら調べてみてね」という形で終わるようにしています。授業との区切りはつけつつ、興味が次につながる余地を残したいと思っています。

齋田:もともと図工の授業で自身の作品に必ずタイトルをつけていたこともあり、朝鑑賞でも「この絵は何という題名?」とよく聞かれていました。

ただ、「朝鑑賞は対話の場」と子どもたちなりに理解しはじめたのか、現在は題名を求めるよりも、自分の考えを言うことや、友達の考えを聞くことに満足している様子が見られます。

福田:私は題名や作者名を伝えたことはありません。それぞれの絵に作者の思いがあるとは思いますが、それ以上に、子どもたちが絵を見て、自分なりに解釈していくことが大切だと感じています。

正解を教えたいと思っていたこともありましたが、子どもたちが一枚の絵から豊かな物語を生み出す姿を受け、どんな意見も正解になっていくんじゃないかな、と感じるようになりました。

小林淳:私は、絵の題名も作者も知らない状態で子どもたちと一緒に面白がりながら見ており、最後まで「これは何の絵なんだろうね」と問いを残して終わることが多いです。鑑賞後も自分のところに来て話してくれる子がいて、それぞれが自分の見方に自信をもてる時間になっているのかなと思います。

宮下:なるほど、ありがとうございます。絵には「こう見なければいけない」という、いわゆる正解はないと思っています。一つの正解に向かって進むというより、行き先の分からない船で航海をして、結果的にたどり着いた場所を面白がるような…朝鑑賞はそんな対話を重ねる時間なのではないでしょうか。

考え、判断し、それぞれができる形で表現する。朝鑑賞でうまれるその繰り返しが、学びにつながる力になっていくのではないかと感じています。



座談会の中では、「普段はあまり話さない子どもが、生活記録ノートに『朝鑑賞、私は面白かった』と書いてくれたことがありました。」という、エピソードも紹介されました!



子どもたちにとって朝鑑賞は、「安心してなんでも話せる時間」とどまらず、友達のさまざまな考えに出会い、「自分の見方が広がっていく時間」として受け止められているようです!

Q:朝鑑賞の楽しい理由はなんですか?(複数回答あり)



こんなところが楽しい!

- 自分の答えを否定されないし正解がないから、多く発言できるようになったところ。
- 何か物や絵を見るときに違う角度から見たり、考え方が柔軟になったところ。
- まだ話したことのないクラスメイトや、みんなで考えた方が、意見がたくさん出るので、楽しいところ。
- あまり話す機会のない人と話したりできること。

こんなところがつまらない…

- 見ている絵に対して悪口やネガティブな言葉を口にする人が多く、聞いていて嫌な気分になること。
- 絵の内容を全く理解できないこと。

ここに注目!

朝鑑賞を実践するなかでの変化について、先生からの一言をご紹介します。



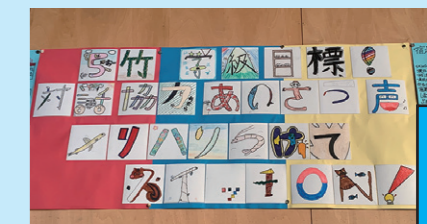
和小学校 福島章浩先生

「自分が一番変わった時間」

朝鑑賞で子どもが変わったというよりも、自分自身が変わったという印象が強いです。朝鑑賞では、「一緒に絵を見る仲間」という意識で、子どもたちと楽しんで鑑賞しています。子どもの予想外の発想が、自分の新たな見方や考え方に繋がっていると感じ、そういった積み重ねから、「正解を教える」といった関わりではなく、自分も子どもも「ともに考え合い、楽しみ、学び合う仲間」と捉えるようになり、上下のないフラットな関係性へと変化しました。子どもたちもそんな自分の意識を受け取ったのか、普段の授業でも「それ違うよ!」と、相手の意見を否定する発言が少なくなり、お互いの意見を聞きあうことが、いかに自分の学びにとって大切なことなのかということに、少しずつ気づきはじめてるように感じます。子どもたちが考えた学級目標には、「対話」の言葉が入ってます。子どもたち自身が対話の良さを感じ、もっとできるようになりたいという思いがあったのでしょうか。自分も子どもたちも、日々対話を大事にするようになってきたという、自分が一番変わらせてもらった経験でした。



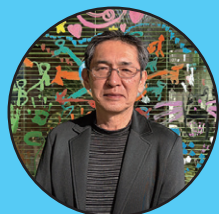
「対話 協力 あいさつ 声メリハリつけてスイッチON!」と書かれています。



学級目標

朝鑑賞のはじまりは、美術館から!?

学校で行われている朝鑑賞の背景には、市の美術館学芸員が2007年から行ってきた対話鑑賞活動の積み重ねがあります。学芸員が現場で培ってきたファシリテーションのノウハウは、現在では学校へと広がり、先生方による朝鑑賞の実践を支えています。今回は、先進的に対話鑑賞に取り組み、活動を続けてきた丸山晚霞記念館・佐藤聡史館長に、詳しくお話を伺いました。



●佐藤聡史(東御市丸山晚霞記念館 館長)

2001年から東御市梅野記念絵画館の学芸員として勤務し、各小中学校で対話鑑賞を中心とした教育普及事業を展開。2006年の開館から、丸山晚霞記念館の学芸員となり、東御市が育んだ明治水彩画のパイオニア、“丸山晚霞”の顕彰を目的とした展覧会の企画を担当する。2020年より同館の館長を務める。

Q 対話鑑賞をはじめたきっかけを教えてください。

A 梅野記念絵画館の学芸員として勤務していた当初は、“地域と美術館をつなぐこと”が自分の役割だと感じていました。その中で学校教育との連携に関心を持ち、地域の小中学校と協働した取り組みを模索していました。

そうした折、2007年に、美術館で対話鑑賞の研修会を開催しないか、というお話をいただき、県内の教員や美術関係者を対象に実施することになりました。その研修会で、子どもたちとの対話鑑賞を拝見し、活動に意義を感じました。

その後、市内すべての小学校を訪れ、市内美術館の所属作品を携えた出張授業として、対話鑑賞を行うようになりました。

Q 市内の全小学校で対話鑑賞行ってきたのはすごいですね! 実践するなかで、印象に残っている出来事がありますか?

A 小学校6年生のクラスで対話鑑賞を行った際に、最初は距離を置くような態度をとっていた子に対し、「何か感じたことはある?」と声をかけると、自分の考えや気持ちを率直に話してくれました。その様子に担任の先生も驚かれ、「作品によって、何かが動いたのかもしれませんが」と話されていたことが、心に残っています。一見、作品について話し合っているように見える対話鑑賞ですが、実際には子どもたち一人ひとりの経験や感じ方が言葉になって表れます。対話鑑賞とは、作品を介して自分自身について語り合う時間なのだと実感した経験でした。

Q 現在、対話鑑賞は朝鑑賞として学校で定期的に取り組みられています。朝鑑賞に、どのようなことを期待されますか?

A 朝鑑賞は、正解や不正解のある活動ではありません。一つの問いに対して各々の見方・考え方をもち寄り、対話を重ねながら思考を深めていく時間です。

情報にあふれる現代社会において、子どもたちはいずれ、自分の進む道を自ら選択していくことになります。朝鑑賞は、数ある選択肢の中から自分にとっての最適解を考え、選んでいく力を育むための、予備的な経験になるのではないかと感じています。

そのためにも、まずは大人が子どもたちの見方・考え方を受け止め、尊重する姿勢が大切だと思っています。また、一つの作品にじっくり向き合う朝鑑賞の時間は、物事の本質を見極めようとする力を育てる機会にもなると期待しています。

来年度も各学校で朝鑑賞に取り組みます。
今後の動きにもご期待ください!

パンフレット
vol.1とvol.2は
こちらから!

